

船がある。藩の御用船、捕鯨船、家船衆の船である。これらを加えると、優に三〇〇艘を超える船があった。また、この中に槽漕ぎ舟がないところを見ると、記された船は「課税対象」であることが推測され、いかに海と関わって生きた人々が多いかが分かる。

大村領松島には、日々数十艘が停泊している。大村領では崎戸が「切手改め所」になっており、これが海の関所である。関所で手形を見せ、松島に停泊する。松島には問屋、旅籠などのほか、女郎屋があったことが記録から分かる。今と違って、廻船は一旦港を離れると、数か月、あるいは一年近く戻れないこともあり、現在とは全く異なる海の流通とその生活があった。

大村藩の西彼杵半島の各港には、全国各地からの廻船が常に停泊しており、松島と多かれ少なかれ同じような港の光景が見られた事であろう。日本海、瀬戸内方面から長崎を目指すもの、あるいは薩摩、肥後、有明海沿岸の各藩から来る廻船は相当であったろうことは容易に想像できよう。因みに大村藩の廻船は、山形県の飛鳥でも廻船帳に記されている。廻船帳は廻船問屋の記録で、全国すべての廻船帳が残っているわけではなく、また五反帆程度の船でも大村湾内から瀬戸内まで行っている記録もあることから、相当の船が遠方まで商行為で動いていたことが分かる。大村藩の幕末の人口は約十二万人で、その四分の一から三分の一が廻船に関わる人と、造船、荷卸し、家族等であろうと想像すれば、従来の江戸時代Ⅱ農業に基盤を置いた社会とはかけ離れた大村藩の実態が浮かび上がった。

くる。

江戸後期の安政の開国以前は、戸町村は大村領であったが、開国とともに戸町村は幕府領に収公され、代わりに古賀村の一部が大村領となった。戸町村の大浦には大村藩の役所が置かれており、廻船つなぎ場として当然のこととして問屋など、港に必要な機能と施設があったものと解されるが、領地替えのことは大村藩の記録には出てこない。因みに、戸町村在住の武士は、大村藩士のままで居留地警備のため留め置かれた。

問題となるのは、天領である長崎港に全国の民間廻船が入ることができたのであるか。異国船交易との関係からすれば、特に許された藩の船は入ったかも知れぬが、一般の商人の船は入ったのだろうか。また、天領長崎の商人たちは、廻船を持って全国に商売に行けたのだろうか、疑問である。

ところで西彼杵半島を陸の孤島と呼び始めたのは何時からだろう。江戸時代の大瀬戸の人口と現在の人口を比較すると大きくは違わない。孤島ではなく中継基地だ。歴史を考える私たちが曇ったフィルターを付けたままでは、歴史とそこで生きた人々の暮らしは見えてこないのではないだろうか。

●平成二十八年年度長崎県地方史研究会総会と研究発表会

平成二十八年年度長崎県地方史研究会総会と研究発表会は、六月二十六日(日)、長崎県勤労福祉会館で開催された。総会に先立ち十一時から十二時まで、役員会が開催され、議事について

審議がなされた。総会は、十三時から開催され、次の議題が承認された。

- 一、平成二十七年年度事業報告
- 一、平成二十七年年度決算及び監査報告
- 一、平成二十八年年度事業計画案
- 一、平成二十八年年度予算案
- 一、平成二十八年年度役員改選

この年は役員改選の年で、新たに常任理事に長崎史談会幹事長の村崎春樹氏、大村史談会会長の久田松和則氏が承認され、他は再任を承認された。

総会終了後の十四時から研究発表会が行われ、長崎史談会会員の徳山光氏による「雪のサンタ・マリア」、長崎近世史研究会会長の新名規明氏による「鷗外史伝作品と長崎」の研究発表があった。

●第二回研究発表会

第二回研究発表会は、十一月十三日(日)大村市のプラザおおむらで百名以上の参加者の下で開催された。主催した大村史談会から稲富裕和会員の「街道と海道―近代を運んだ長崎街道」、久田松和則会長の「酪酐武士事件から見た大村城下と往還」と題して研究発表がなされた。午後は大村史談会の会員の案内により、本陣跡、高札場跡・駅場跡、水主町、萱瀬丁、田町、諫早丁、大神宮、本陣跡のコースを二班に分けて史跡巡りが行われた。

平成二十八年年度  
県内加入団体の  
活動状況

●有家史談会

昭和五十七年から活動を始めた有家史談会が念願の機関誌を創刊したのは平成六年で、今年度は機関誌「嶽南風土記」二十四号を発行することができました。



「嶽南風土記」

今号は日本二十六聖人記念館館長としては最後の寄稿となったデ・ルカ・レンゾ氏の「雪のサンタ・マリア」や石造物研究家・大石一久氏の「キリシタン墓碑の資産的価値とその継承」など十二人の方々の論文を掲載することができました。平成二十九年は、創刊二十五周年記念号となります。

どの郷土史研究会にも共通しているのは会員の高齢化で、過疎地域はその傾向が著しいと思われれます。島原半島でも吉田安弘先生、野村義文先生、篠原徳之先生、高木重幸先生などの郷土史の先達を失いました。



春の総会で挨拶する  
原田博二会長



秋の研究発表会で挨拶する  
久田松和則大村史談会会長